

歳月は風の如くで、早くも新しい年2010年を迎えることになりました。この来る春に、CRNは設立15年目に入ることになります。

昨年1年間は学会活動が活発でした。9月12日、13日は日本子ども学会の第6回子ども学会議（学術集会）、その前日の9月11日には第4回東アジア子ども学交流プログラムの会議を開き、成功を収めました。中国及び韓国からいらした研究者の方々にとっても、日本子ども学会とCRNの活動を見て頂く良い機会となったと思います。また、11月2日、3日には上海で第5回東アジア子ども学交流プログラムを開催しました。さらに交流を深める良い機会となり、大変嬉しく思っております。

「子どもはいつでも、どこでも危機にある。」“Children at risk, whenever and wherever”。われわれ大人たちが子どもたちへの優しいまなざしと、チャイルドケアリング・デザインの心をもって、子どもたちの心と体を育てなければ、いつでも、どこでも問題は起こり得るのです。それらの問題を解決するには、幅広い分野の研究者・実践者の情報を集約し発信することが重要です。いろいろな学問的背景を持った人々、特に異なった国、民族、文化、時代の情報を、お互いに比較することで多くを学ぶことができるからです。

2010年も、CRNスタッフ一同、従来にもましてそのコンテンツ、特に英語版・中国語版の充実を図り、国際的に発展したいと考えています。CRNをご覧いただいている皆さん方からも、さらなるご支援を頂けますよう、ここに心よりお願い申し上げます。



Child Research Net 所長

小林 登

東アジア「子ども学」 交流プログラム活動報告

2009年9月、お茶の水女子大学（日本・東京）で第4回、11月には華東師範大学（中国・上海）にて第5回東アジア子ども学交流プログラムを開催しました。活動報告の詳細は2、3ページをご覧ください。

東アジア「子ども学」 交流プログラムとは？



2007年11月の中国上海での開幕式を経て、2009年度まで5回の活動を実施しました。過去のプログラム内容は、CRNサイトでご報告しておりますので、そちらをご覧ください。

<http://www2.crn.or.jp/blog/event/03/0300/>

プログラムの狙い

東アジアにおいて育児・保育・幼児教育をテーマとする研究者の相互交換講義を支援し、子ども学の普及ならびに国際化を図り、子どもを取り巻く環境の改善や諸問題の解決に役立つ学術活動推進を目指しています。

主催 チャイルド・リサーチ・ネット (CRN)

協賛 (株)ベネッセコーポレーション
ベネッセ次世代育成研究所

チャイルド・リサーチ・ネット (CRN)とは？

- 「子ども学」研究所です。
- 「子ども学」を柱に、インターネットによるネットワークと、シンポジウム、講演、プレイショップなどの研究活動を生かし、世界中の研究機関や研究者と交流しながら、子どもを取り巻く諸問題の解決に取り組んでいます。



第 4 回 活 動 報 告

(2009年9月11日 お茶の水女子大学〈日本・東京〉)

●テーマ

言葉の発達と脳科学 ～東アジアでの研究と実践～

●登壇者

小林登 (CRN所長、東京大学名誉教授)、小泉英明 (日立製作所役員待遇フェロー)、朱家雄 (華東師範大学教授)、姜勇 (華東師範大学副教授)、張明紅 (華東師範大学副教授)、内田伸子 (お茶の水女子大学教授)、李基淑 (韓国梨花女子大学教授)、周念麗 (華東師範大学副教授)、榊原洋一 (お茶の水女子大学教授)

※名前は登壇順

講演の様子

●外国語としての第2言語習得と脳科学



小泉英明氏

グローバル化に伴って、第2言語に関する問題は地球規模の社会問題になりつつあります。他国の方とのコミュニケーション手段としての第2言語が求められているが、日本ではどうなっているのか。脳科学から見た効率的な学習方法があるのか。報告の中で日本の英語教育の問題点や英語学習に必須のやる気 (パッション) が日本の学習者に欠けていることを指摘しています。

●幼稚園のカリキュラムにおける“早期閱讀”※



朱家雄氏

物語『さかなはさかな』に対する二種類の読み解きと演繹によって、欧米諸国とアジア諸国の幼児教育理論および実践の動向が具体的に述べられました。また中国における幼児の“早期閱讀”の現状と課題をふまえて、その意義と効果にも触れていました。

(※早期閱讀とは、幼児期に絵本や活字を読ませる読書活動を指します。)

●上海市幼稚園教諭の文化的状況についての調査



姜勇副氏

幼稚園教師の専門性を高めることは、幼児教育の質を高めることに直結します。その「教師の専門性」の中心は文化的素養であるという認識から、上海市の13地区で304名の教師に対するアンケートが行われました。非常に興味深い結果が報告されました。

●中国の幼稚園における“早期閱讀”のデザインと実施



張明紅氏

幼稚園における早期閱讀の具体的な取り組み、課題について述べられました。中国の文化的特色を取り入れ、書き言葉や漢字を習得し、子どもの批判的な思考を培うことに有益な活動として取り組まれているという、大変興味深い内容でした。

シンポジウム

幼児のリテラシー習得に及ぼす社会文化的要因の影響
～日・中・韓比較～

オーガナイザー：榊原洋一

シンポジスト：内田伸子、李基淑、周念麗



お茶の水女子大学〈日本〉、梨花女子大学〈韓国〉、華東師範大学〈中国〉とベネッセ次世代育成研究所の共同研究について、初めての公開発表となりました。

しつけスタイルと語彙力に相関があることに大きな注目が集まりました。しつけスタイルは、日本と韓国は共通して、「共有型」(ふれあいを重視し、子どもとの体験を享受・共有する)、「強制型」(大人中心のトップダウンのしつけや力のしつけ)、「自己犠牲型」(子育て負担感が大きく、育児不安が放任かに二極化)の三つに分類されました。「共有型」のしつけスタイルの家庭で育てられている子どもは、日本、韓国ともに語彙力が高いことが分かりました。

一方、中国では、「共有調和型」(親子間で感情の共有ができ、協和的な関係)、「共有厳格型」(子どもと感情の共有ができる一方、子どもを厳しくしつける)、「疎遠無視型」の三種類に分類でき、一人っ子のわが子に対する親の期待、子育て観の違いが現れる結果となりました。

第 5 回 活 動 報 告

(2009年11月2日、3日 華東師範大学〈中国・上海〉)

●テーマ

情動の子ども学

●登壇者

小林登 (CRN所長、東京大学名誉教授)、朱家雄 (華東師範大学教授)、渡辺富夫 (岡山県立大学情報工学部教授)、山本登志哉 (早稲田大学教授)、沈月華 (国際和平婦幼病院主任医師)、周念麗 (華東師範大学副教授)、華愛華 (華東師範大学副教授)、谷村雅子 (国立生育医療センター研究部長)

※名前は登壇順

1日目

●人間は何故心をもったのだろうか、脳の三位一体学説から考える



小林 登氏

人類進化学・脳の三位一体学説の視点から、人間はなぜ心をもったかが述べられました。理性の脳の基礎となる本能・情動脳がいかに大切かを説き、子どもに本能・情動脳にポジティブな感情（喜び）いっぱいの生活をさせることで理性の脳も活発になると強調しました。

●中国における幼児メンタルヘルス教育の実践と研究



朱 家雄氏

上海の幼稚園でのメンタルヘルス教育プログラムの紹介と報告です。このプログラムの実施調査により、子どものコミュニケーションスキル、問題解決能力などを高められることが明らかになったようです。

●人を引き込む身体的コミュニケーション技術



渡辺富夫氏

赤ちゃんは言葉が分からないが、リズムには反応することを渡辺氏が発見したのは20数年前のこと。その原理を利用して、人間とコミュニケーションが取れるロボットを開発研究し続けてきました。本講演では、心が通う身体的コミュニケーションシステムE-COSMICの紹介と説明があり、その技術を採用して開発された「ペコッパ」（空気の読める草・花）を実演しながら講演し、観客を魅了しました。

●所有に関する行動の日中文化比較：子どもはいつ「中国人」になるか？



山本登志哉氏

日中の大学生が中国映画「あの子を探して」を見て議論した際の意見の相違や、中国人とのコミュニケーションの具体的事例が紹介され、日中の所有に対する考え方・倫理感情の違いが明らかにされました。山本氏の研究によりますと、その所有に関する違いは、2歳の時から有意差が見られるそうです。

●ベビーマッサージとアタッチメントについての研究



沈 月華氏

乳幼児のボディーマッサージとアタッチメントの関係についての調査報告があり、感情調節能力との関係性が示されました。

●親の期待と子ども（1～6歳児）の心理発達について —中国11都市3000名の児童の調査報告



周 念麗氏

中国全土11都市の1～6歳の子どもを持つ親に対する大規模な調査の結果が紹介されました。かつて学力重視一辺倒だった親たちの意識は、「セルフコントロール」「ソーシャルスキル」「リーダーシップ」「認知能力」「自立能力」にそそがれています。地域の差も興味深いです。

2日目

●教育的視野での子どもの遊び



華 愛華氏

近年の中国教育改革では、幼稚園の教育の中に「遊び」を取り入れるべく、遊びの教育的意義が強調されるようになりました。華先生は「教育のための遊び」が本来の「遊び」とは異なることを指摘し、本来の遊びの意義を問いかけ、その重要性について言及しました。

●赤ちゃんはヒトに興味をもつ



谷村雅子氏

1987年に3～24カ月児を対象に行った集団調査では、赤ちゃんのテレビに対する詳細な研究がなされ、その報告がありました。会場から多くの質問が寄せられ、乳幼児に対するメディアの影響について中国でも大きな関心があることが分かりました。

●日本グッド・トイ展示会

グッド・トイ展示会を実施しました。昨年の杭州幼児師範学校での開催に次いで中国で2回目となります。東京おもちゃ美術館多田千尋館長の監修のもと、日本に流通する優秀な玩具に贈られる「グッド・トイ賞」受賞作品の中から、心や身体の成長に必要な「イマジネーション力」、「自然や科学への好奇心」、「音楽・アートな感性」、「運動能力」、「コミュニケーション力」の5つの栄養素を育むことができるものを厳選し紹介しました。中国現地の幼児教育関係者や研究者・学生は興味津々に見学している様子で、特に「イマジネーション力」を育むおもちゃへの評価が高かったのが印象的でした。



<発行日> 2010/01/29
<発行> チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）〒101-8685 東京都千代田区神田神保町1-105 神保町三井ビル（株）ベネッセコーポレーション内
<編集人> 後藤憲子
<編集スタッフ> 劉愛萍、横井理絵、岩崎菜穂子、桜井玲子、張志剛
<デザイン> 森一典デザイン事務所

日本語サイトの紹介

【研究室を訪れる】

●子どもとメディア研究室

急速に発展するIT時代において、子どもたちはどのように順応し、変化してきているのか、子どもから学ぶ姿勢をもって、子どもとメディアに関する研究に取り組むコーナーです。最新の記事ではトレンドである「クラウド時代の子供たち」を紹介しています。

【論文・レポートを読む】

●子ども未来紀行

「子ども学」に関心のある方から広く情報や意見を掲載しています。日本初の取り組みである立教女学院小学校の「動物介在教育」について連載し、導入の経緯から子どもたちへの影響など詳細につづっています。

●小林登文庫 脳と教育

CRN 小林登所長が Mind, Brain and Education 誌から興味深い論文を選び、私見を加えて内容を紹介します。最近の記事では教育において重要な役割を担うミラーニューロンシステムやメタ認知の発達について取り上げています。

●論点

育児・保育・教育に関して、さまざまな立場の識者からの意見を掲載しています。最新の記事では「親権法改正を考える」をテーマとしたシンポジウム



ネット指導についてなど、まさしく現代を浮き彫りにしたテーマを紹介しています。

●【連載】普段着の小児科医 子育ての脳科学

2008 年から始まった、4 児の父親でもある小児科医による「子育ての脳科学」の連載は 40 回を超えました。笑うこと・泣くことなどの考察や、赤ちゃんの脳の発達・脳の機能など豊富な内容を分かりやすく紹介しています。

新設コーナーの紹介

◆世界幼児教育レポート

(日中英 3 サイトで展開、好評連載中!!)
2001 年、2006 年に OECD によって先進諸国の幼児教育に関する大規模な実態調査の報告書である「Starting Strong (II)」が発刊されました。このように国際社会では、乳幼児期の発達や教育がその後の人生に非常に重要な意味を持つという問題意識のもと、この分野への政策的な関心が高まっています。この世界の動向を受けて CRN では日中英 3 サイトで「世界の幼児教育レポート」コーナーを設置し、23 カ国 2 地域の幼児教育に関わる様々なテーマについて、各国の研究者が執筆した記事を紹介しています。文化や言語など国特有のさまざまな違いから、幼児教育にも各国ならではの特徴があります。自国の幼児教育を見つめ直し、また各国の取り組みから学べるような記事を紹介していきます。

日本語:【世界の幼児教育レポート】

<http://www2.crn.or.jp/blog/lab/00/>

中国語:【世界学前教育報告】

<http://www.crn.net.cn/ecec/index.html>

英語:【ECEC around the World】

<http://www.childresearch.net/PROJECT/ECEC/>

他言語サイトの紹介

【英語サイト】

【Monthly Articles on Children】

研究者や CRN スタッフが、最近話題のニュースや講演会の報告などを紹介するコーナー。最近では CRN 所長が実行委員会会長を務めた、子ども虐待防止キャンペーンのオレンジリボンたすきリレーについての記事「Orange Ribbon Relay to Prevent Child Abuse」を取り上げています。

【Research Papers】

各国の研究者や教育者による、専門的な論文や実践報告を掲載するコーナー。
“Learning to Question—Children’s University Kawagoe” では、日本初の子ども大学の設立から授業開講の様子までを 3 回の連載で紹介しています。

【Presentations】

CRN や子ども学に関連したシンポジウムやセミナーなどの記録を掲載するコーナー。最近では 2007 年～2008 年に開催した東アジア子ども学交流プログラム第 1 回～第 3 回の講演を紹介しています。

【Essay-Children Today】

現代の子ども達の流行や人気のあるもの、教育など幅広いテーマで掲載するコーナー。

【中国語サイト】

【児童保健】

子どもの健康や子育ての悩みを解決するためのコーナー。2010 年からは子どもの発達段階に応じたのアドバイスや子育て栄養レシピも提供していく予定です。

【予防接種】

日本でも問題になっている予防接種は、中国でも深刻な問題を抱えています。中国の地方によっても方針が異なり、予防接種の回数と時期は日本と大きな違いがあります。

【非正規学前教育研究】

出稼ぎ労働者の子どもたちを対象に実施するボランティアの就学前教育のコーナー。北京師範大学学前教育学部の大学生たちが日々の奮闘と成長をつづっています。

【新聞点評】

子どもに関するニュースや出来事について情報発信するコーナー。

学会報告

■日本子ども学会—2009 年学術集会の報告

「子ども・環境・脳科学」と題して、2009 年 9 月 12、13 日にお茶の水女子大学で第 6 回子ども学会学術集會が行われました。2 日間にわたり、日本子ども学会代表の小林登氏が「チャイルドケアリング・デザイン」について講演を行い、お茶の水女子大学元学長の本田和子氏が「子どもが忌避される時代」を基調講演してくださいました。

プログラム

【1日目】9月12日(土)

代表講演: 小林登 (日本子ども学会代表)
基調講演: 本田和子 (お茶の水女子大学元学長、名誉教授)
シンポジウム①「今、早期教育を考える」
シンポジウム②「子どもとゲームをめぐる過去・現在・未来」

【2日目】9月13日(日)

シンポジウム①「良質のチャイルドケアリングとは」
公募シンポジウム「子育てを手助けする『頼りになる情報環境』の構築に向けて」
鼎談: 「狼少女はいなかった」
鈴木光太郎 (新潟大学教授)、内田伸子 (お茶の水女子大学教授)、榎原洋一 (お茶の水女子大学教授)



刊行物の予告

■東アジア「子ども学」交流プログラム報告書 2010年3月に発刊します!

2009 年度の 2 回の活動詳細を掲載する貴重な一冊になります。どうぞご期待ください。

